

〈1. インタビュー〉

DX を強力に推進し、成功事例の ショーケース化により 収益向上に貢献

NTTコミュニケーションズ（以下、NTT Com）システム部は、「経営戦略を理解し、業務を俯瞰しうる立場でITを活用し事業の改革をリードする」というビジョンに基づき、社内のデジタルトランスフォーメーション（以下、DX）推進に注力している。同部部長の及川将之氏にお話を伺った。



NTTコミュニケーションズ株式会社
システム部長 及川 将之氏

DX Enabler™ を目指す NTT Com の「攻めと守りのIT」

—改めてシステム部の役割、活動の概要について教えてください。

及川 お客さまと共にDXを実現するパートナー、DX Enabler™を目指すNTT Comにおいて、数百に及ぶ社内システムを一元的に管理する組織です。24時間365日、システムを安定稼働させる効率的な「守りのIT」に取り組む一方、DevOpsや自動化といった「攻めのIT」を推進しています。実現に向けてICTインフラ基盤を実現する「Project SKY」、ネットワークのあり方を考

え直す「Project Ocean」といった取り組みも具体化しました。当たり前ですが、DXを実現するためにはSoEへの投資も必要です。その原資を自ら作り出すため、贅肉をそぎ落とすことにも取り組んでいます。

DXの実現に向けSoEへの投資を可能にするための取り組み

—「贅肉をそぎ落とす」とは、例えばどのようなことでしょうか？

及川 開発の効率化によるコスト削減です。まずマイクロサービスアーキテクチャを採用して多数の社内システムを機能単位に分割し、お互いをAPIで連携させる構想を進めてい

ます（図1）。各システムを更改するタイミングで、特にSoEについてはSaaSやPaaS、そしてパッケージも有効に活用し、信頼性・品質を保ちながらアジャイルに開発する取り組みを進めています。すでに複数の事例があり、この手法の適用領域を広げているところです。外部の良いものを積極的に取り入れる一方で、独自の付加価値を内製開発によりしっかりと生み出すことも重視しています。

—システム更改のコストを削減しているということですね。

及川 更改だけではありません。EOLを考慮しながら、残すべきシステムは適切にメンテナンスしながら有効活用します。こうして生み出した余裕を、DX等に投資できる目処が立ってきました。特にレガシーシステムを保有する企業にとっては「イノベーション」と、適材適所でレガシーシステムも有効活用する「最適化」のバランス（図2）をうまく取ることが重要です。この取り組みを通じたノウハウも、レガシーシステムを保有し同じような課題を持つお客さまに提供で

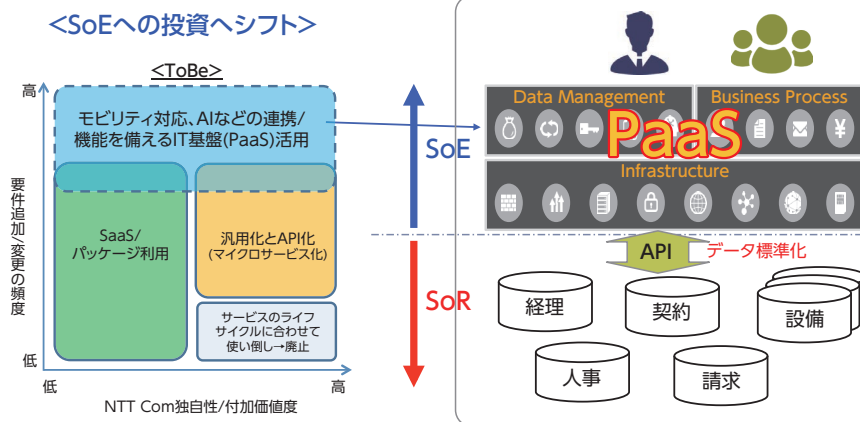


図1 DX 実現イメージ

できれば、と考えています。

積極的に自社のDXに挑戦 成功事例をショーケース化

——「自らのDX」について、事例をご紹介いただけないでしょうか。

及川 最近完了した大手町プレイスへの本社移転を視野に、様々なことにチャレンジしてきました。従来のシンクライアントと同等のセキュリティを保ちながら、より便利に社外からも使える「セキュアドPC環境」の導入（本特集“2. 働き方改革・生産性向上”参照）もその一例です。社員にも好評で、ショーケースとして営業部門が提案しており、お客さまの反応も良好です。このようなショーケース化の営みに、今後もこだわる考えです。

——ショーケース化にこだわる理由についてお聞かせください。

及川 一般的には、社内システム部門はコスト削減ばかりが求められがちです。しかしNTT Comはシステムをお客さまに提供する会社でもあります。つまりシステム部は自身のノウハウをお客さま提案に活かせるという恵まれた立場にあり、コスト削減だけでなく付加価値を追求する動機があります。DX Enabler™を目指す以上は自らがDXに取り組むことも重要です。こうした理由から、成功事例のショーケース化を強く意識しています。

——ほかにショーケース化に向けた取り組みはありますか？

及川 PaaSやSaaSを活用し効率良くシステムを開発する取り組みのショーケース化を進めています。他にもRPA（Robotic Process

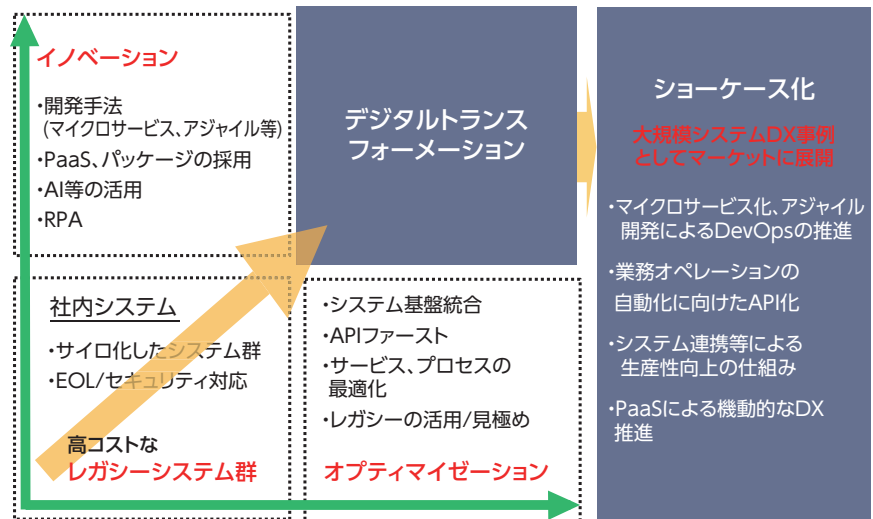


図2 社内システムのDXとショーケース化

Automation)による自動化・効率化が一定の成果を上げています。こういった取り組みを継続し、NTT Comならではの成功事例を生み出したいと考えています（本特集“3. 開発プロセス・業務プロセスの変革”参照）。

改善のお手伝いではなく 「イノベーションレベルの変革」を

——ほかに注力されている取り組みはありますか？

及川 全社的な取り組みとして、社内の各種データを収集・可視化・分析する活動（本特集“4. データドリブン経営”参照）を推進しており、コスト削減や売上拡大の貢献につながってきています。また「社内システムだから使い勝手が悪くても我慢して使ってください」という姿勢ではショーケースにはなりません。まず社員に満足して使ってもらえるよう「デザイン思考」による開発を心がけています。DevOpsの実践も進めており、開発の早い段階で現場の社員にプロトタイプを確認してもらいます。必然的にアジャイル開発が

増えていきました。スピーディーな開発につながるPaaSやSaaS、そしてパッケージ活用など、各分野のプロフェッショナルの育成にも取り組んでいます。

このように担当をまたがる業務が多いので、横通しのコミュニケーションも重視しています。ハロウィンの日にはオフィスを飾り付けして、私も含め有志メンバーが仮装し一日楽しみながら業務を行いました。ボトムアップで約100人の社員が参加して盛り上がりました。

——今後に向けた抱負をお聞かせください。

及川 DX Enabler™として目指すのは単なる「改善のお手伝い」ではなく、「イノベーションレベルの変革」です。現在様々なことに取り組んでいますが、それらはバラバラではなく、すべてがDXに向けた取り組みです。これらを経営に資するものになるよう、如何にまとめて推進していくか、に注力していきたいと思えます。

——本日は有難うございました。